

伊賀市社会事業協会 2019

2019年1月15日 第37号
 発行者
 社会福祉法人伊賀市社会事業協会
 理事長 西岡時彦
 〒518-0032 三重県伊賀市朝屋739番地の2
 TEL: 0595-21-5545
 FAX: 0595-23-6670
 URL: <http://www.iga-sjk.or.jp/>



講師の佐々木常夫様と共に記念撮影

おかげ様で昨年12月1日には、当法人の創立70周年記念式典を挙行させていただきました。そして、新しい年を迎えられましたことは、ひとえに皆様の長年にわたるご指導ご支援の賜物と衷心より深く感謝申し上げます。今後とも子どもやご利用者に寄り添って、豊かな人生の日々をお過ごしいただきますよう最善の支援をさせていただきたいと存じます。同時に、施設の特質やそれに関連する事

明けておめでとつございます

本年もよろしくお願い申し上げます

業目的を達成し、お一人おひとりがより良く生きられるよう微力ながら貢献していきたいと思えます。

当法人の創立に向けては、終戦直後の苦しく貧しい社会状況下において上野市内の有志の民間人が相寄り、市民のご理解とご協力を賜わりながら、ご努力していただきました。

今から40年前の昭和53年春、協会創立に深い関係を持ち、ご尽力をいただいた方々が集まれる機会がありました。それは『創立の頃の思い出を語る』をテーマにした会合でした。ここに掲載した内容は、会費と会員を募集するために東奔西走された苦労話の一部です。

中森（中森勉氏は昭和三十三年から昭和五十九年まで理事長として在職）…私は池原さんに頼まれて、私と武田さんと中野さんの三人が委員を委嘱された。そして、二百円ずつの会費と、会員を集めてくれと頼まれた。叱られもって、私は、西之丸をすっかり歩いた。何ともきつかった。「そんな金を何故出さねばならないのか」って、毎年二百円もの会費を募集に行った。その時、四、五十人の委員がいたはずだ。濱辺さんも委員で、最も若いのが私だった。



職員コーラス「ステラ」の合唱

協会草創期は、大方の人たちは貧しい暮らしでしたが、人間と人間が直接面談する時間があり、いたわりの言葉も行き交い、自分らしいサイズの希望が見え始めた頃でもあったと思います。



オープニングに出演するひかり保育園の5歳児

当法人は、昭和時代に生まれ、平成時代を乗り越えてきました。さらに新しい元号を迎えようとしています。「世界のどの国も経験したことのない超少子高齢化の波はあらゆる場面に影響を及ぼすだろう」、「無縁社会の拡がりはどうなっていくのか」、「自然の猛威にどこまで耐えられるだろうか」、「答えの出せない思いは止まることなく巡ります。

私たちはどのような時代にあっても、市民に支えられて生まれ育った社会福祉法人としての矜持を基盤にして、謙虚に誠実に支え合いながら邁進したいと願っています。

平成三十一年 正月

理事長 西岡時彦

―エッセイ― 幼い目撃者

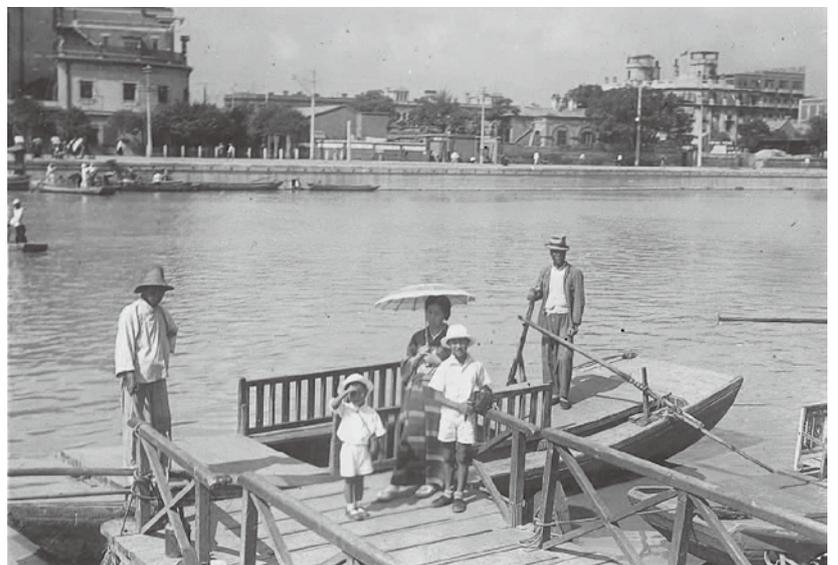
二〇一七年のノーベル文学賞を、カズオ・イシグロ氏が受けられた。長崎出身の日系イギリス人で喜ばしい限りだが、受賞を知るまで私は一作も読んでいなかった。若い頃から多読なつもりであったのに何ということ。早速伊賀の書店に電話で問い合わせたところ、ハヤカワ文庫から出版の八作全部ありますとのこと、何となく意外であったが取り敢えず五作届けてもらった。デビュー作「遠い山なみの光」から第五作「わたしたちが孤児だったころ」までの五作である。まずどれから読むか少し迷ったが、ベストセラーになったという第五作にした。ベストセラーだからではなく、一九三〇年代の上海租界を舞台にした作品という紹介に強く惹き付けられたのである。私より随分若いカズオ・イシグロ氏が、何故見たこともない租界地を素材にしたのか、調べてみるとその父石黒鎮雄氏が一九二〇年に上海で生まれていることがわかった。なるほどそのあたりに作品発想の根拠があるのかもしれない。

さて私は、イシグロ作品の解説をするつもりではない。第五作はスケールの大きな冒険譚で面白く読み終えたが、読後の私のまなうらには、幼い頃に住んでいた天津とその租界地が回り灯籠のようにめぐっていたのである。幼い目に映ったものは存外鮮烈にのこるようだが、当然不確かである。以下は後年の資料で記憶を確認補強しながら綴ったものであることを申し添えたい。

早世した私の実父は横浜正金銀行につとめていたが天津支店長に赴任した時期があった。天津で

の写真が数枚のこっているが、その裏に父の字で昭和十一年或いは十二年と記されているからその頃である。昭和六年生まれの私は五歳前後ということになる。銀行と私たちの社宅とは隣接しており、表の道路は河に沿っていた。つまり毎日河を見ながら暮らしていたのである。河幅は然程広くないがコンクリートで護岸され一寸した船舶が接岸出来るようになっていた。「白河」というこの河はかなり水深があつて、三千トン位の貨客船が渤海湾から遡上していたという。銀行の近くには日本人居留民の多く住む地域があり、少し離れると、ごみごみした中国人の町や市場が広がっていたようだ。市場には決して一人で行くなど大人たちは私に言った。

対岸にはフランスとイギリスの租界地があり、中国人の操る渡し舟で銀行のすぐ近くから往き来することが出来た。父は兄と私を時々租界の公園で遊ばせてくれた。租界には整然とした並木道に沿って美しい住宅が並び大きな立派な建物もあつた。河ひと筋渡るだけで景色が一変する不思議な感覚は今も忘れない。租界という言葉の意味を存じない人があつて当然の今世であるから、簡略に説明させて頂く。租界とは、清国、のちの中華民国内の外国人居留地のことであるが、治外法権で、いわば侵略活動の拠点としての性格をもつものである。上海や天津などに多く存在しイギリス租界フランス租界などが有名、日本も西欧列強におくれて加わつたが敗戦で全てを失った。しかし西欧列強の租界もあの大戦の中で雲散霧消することとなったのである。大戦後もイギリスから返還されなかつた香港は、租界地ではなく租借地であるが租借期限を終えた一九九七年、イギリスは過



昭和11年8月、天津白河の渡し場にて母と兄と私、対岸はフランスとイギリスの租界、写真撮影は父。

去を謝罪することなく傲然と去った。今は中国の特別行政区である。

さて、幼い私の見ていた天津にもどる。銀行の傍を流れる白河を、人の死体がしばしば流れくたないようにしたのである。まぼろしのような光景であるが兄も見たと言っている。因みに私の兄は九十を超えて今も健在。銀行は河の右岸で、死体は左から右へと流れていた。腐爛し膨れた白い腹を水面に見せて流れる死体を茫然と見る大人たちに混じって私も見た。実はこの恐ろしい光景の記憶は、昭和十二年夏に白河上流地域で発生した「通

州事件」と合致するように思う。通州は停戦協定による非武装地帯であったが、日本軍機の誤爆をきっかけに日本と中国の部隊が交戦、日本人居留民も多く殺害された。やがて停戦になるが、巻き込まれた双方の一般人の死体が河に投棄されたとしても不思議はない。戦争というものの恐ろしさの本質は、感覚の鈍磨であろう。それにしても対岸の美しい租界から、フランス人やイギリス人はアジア人同士の殺し合いを嗤いながら見ていたのであろうか。上海生まれの石黒鎮雄氏は生前カズオ・イシグロ氏に何を語ったのであろうか。ベストセラーの中の租界像は私には少し物足りない。天津にも事件の余波の及ぶ兆しがあったようである。海軍陸戦隊が警備に付いたようだ。私の記憶にのこるのは、銀行近くに接岸した一隻の日本の軍艦である。水兵が私を背負って狭い橋を器用にわたる艦内を見せてくれたが、中の様子は何も覚えていない。大きな軍艦に思えたが、兄の話では、河岸警備を主任務とする小さな砲艦だそうだ。

その後の私の記憶は大変淡い。淡いというより大方欠落している。私は満州の古都遼陽で小学校一年生になったから、天津を去ったことは確かなのであるが、目に焼き付くほどの映像がその間なかったのかもしれない。そもそも五歳六歳の幼児の記憶とはどういうものか、サイコロジストにでも尋ねてみたい。

旧制中学二年生になった私は、大連で敗戦をむかえた。スターリンソ連の残虐性は到底言いつくせない。想えば私たち昭和ひと桁は、あの壮絶な動乱期の最後の目撃者なのであろうか。

会長 森下 達也

創立70周年を迎えて

社会福祉法人伊賀市社会事業協会の前身は、戦前の方面委員（戦後の民生委員制度の前身）活動を担保するために、市民有志の協力を得て後援会が組織されたことから始まります。

同後援会は、時代とともに変遷し、昭和20年の敗戦後、恩賜財団同胞援護会上野支部にその事業【上野市第一幼児保育所（現・曙保育園）、第二幼児保育所（現・睦保育園）の運営】が引き継がれました。

当時の日本は、敗戦とともに70万人にも及ぶ在外邦人の引き上げもあり、庶民は、生活物資にも事欠く厳しい生活を余儀なくされていきました。

そのような時代背景の中、新たに民生委員法が制定されることになり、上野市では民生委員活動の強化とその裏付けとなる福祉事業体を組織する必要性に迫られていました。そこで有志の民間人が中心となり、また多くの市民の協力もあつて、昭和23年9月に上野市社会事業協会が設立されました。

当法人はその創立の精神である「相扶相愛」の下に、上野市における救済・援助活動などの社会事業に市民と一体となつて協力することで、戦後の混乱期における民生の安定と社会福祉増進の一翼を担うことができました。

このように戦後の苦難が続いた時期に発足した当法人は、これまで多くの先人達の幾星霜の足跡と各方面の皆様への支えもあつて、発展・成長を続けてきました。

私たちは、創立70周年を迎えられたことに深く感謝し、永年積み重ねた知見や経験を糧として、今後も地域の皆様への負託と信頼に応えてまいります。



七夕まつりで合唱・合奏を披露する子どもたち（昭和30年頃の曙保育園）



委員委嘱状

【昭和23年協会設立時の主な事業】

- 一、保育所の経営
- 二、生活保護法、児童福祉法適用外の救助・援助事業
- 三、授産事業の経営
- 四、薄俸なる児童の保護、救助事業
- 五、一般生活困窮者の一時救助事業
- 六、遺族会、未亡人会、愛々運動協議会への協力
- 七、その他公費を以って支弁し得ざる救助事業



第33回

2018
10/27

子どもフェスティバル

からだをつかってあそぼうよ
～あるく・とぶ・なげる～

開催

子どもたちの絵画展



運動会、芋掘り、生きものなど、
3～5歳児の絵画880点が並びました。



あそびのひろば

身近な素材を使ったあそびがいっぱい。
思いきり体を動かしました。



職員による音楽劇
『大きなかぶ』

子どもたちも
「うんとこしょどっこいしょ」と
声を合わせて応援しました。

児童クラブ共同制作
『ダンボール迷路』

ひたすらゴールを目指して
楽しみました。



<法人創立70周年記念コーナー>



子どもフェスティバル33年のあゆみポスター展

ほかにも、

- ・あかちゃんひろば
- ・子どもと保健コーナー
- ・子どもと食事コーナー
- ・伝承あそびコーナー
- ・つくって遊ぼうコーナー

などで、親子のふれあいを
深められました。

伊賀市最高齢 おめでとーございませー!

特別養護老人ホーム 第二梨ノ木園

9月5日、当園ご利用者・西澤正江様(108歳)が、伊賀市最高齢として岡本栄伊賀市長の表敬訪問を受けられました。

着物姿で市長を迎えた西澤様は最高齢認定証と大きな花束を笑顔で受け取られました。

市長の「伊賀市唯一の明治生まれ。来年もお目にかかりたい」との言葉に「ありがとう、ありがたい。もったいない。最高の喜びです」と、手を合わされていきました。

今年の5月に元号が変わると、明治・大正・昭和・平成・新元号の5つの時代を過ごされることになりました。

これからお元気に新しい時代を過ごして頂きたいと思えます。



大きな花束を抱え嬉しそうな西澤様

2018
11/3

第18回 往古梨まつり開催

今年は当法人の70周年の節目であり、その歴史を感じる展示ブースを梨ノ木園集会室に設けました。協会設立当時の昭和20年代、梨ノ木園が開園した40年代、第二梨ノ木園開園の50年代と、年代別に写真とその時代の生活用具等を展示しました。

「懐かしい!昔はこれでアイロンかけてた」などの声も聞かれ、それぞれの年代全てを知っている方も、知らない方も各々に楽しまれていました。また施設のご利用者も「若い人らはこれ知らんやろ?!」と昔を懐かしみ、いきいきとした表情をされていました。なかには喜びの手紙をくれた方もおり、楽しいひとときを過ごしていただけたようです。



職員による和太鼓演奏。響きを全身で感じました。

盲養護老人ホーム
梨ノ木園



マーチングバンド&よさこいソーランで元気を届けました。

特別養護老人ホーム
第二梨ノ木園



ハンドマッサージで極上のリラックスタイム。

障害者支援施設
梨丘園



10歳若返る?! かもしれないシナプソロジーを体験しました。

老人デイサービスセンター
なしのき

はじめてのグループ支援

「上野手をつなぐ育成会」のご家族から「年齢を重ねた私達がいつまでも一緒に付き添えないので、子どもたちだけでの経験を積んで欲しい」との相談があり、いつもは家族が付き添って行くカラオケに、グループ支援を利用されることになりました。最初は恥ずかしそうにされていたご利用者の皆さんでしたが、一緒に歌を□ずさんだり手拍子するなど盛り上がり、「楽しかった」「また来よう」と話されていました。

時代の変化により、求められるニーズも多様化・複雑化しています。ご利用者が地域で安心して自立した生活が送れるよう、そして社会活動へ参加できるように、個々のニーズに応じた支援を続けていきます。



「またみんなで来ようね」

障害福祉サービス事業所かしの木ひろば

三重県障がい者芸術文化祭へ 作品を出展しました

当事業所では、平成6年の開所時から約10年間「さく・咲く・作品展」を開催してきました。ご利用者の絵画・詩・書道、さをり織などの手工芸作品を展示したり、お茶の会を開き、ご家族や地域の方に心のこもった一服でもてなしていました。現在、作品展は開いていませんが、それ以降もご利用者は作品を作り続けています。

今回、三重県障がい者芸術文化祭が地元伊賀で開催されるにあたり、6名のご利用者が、さをり織りなどの手芸品や、俳句・モザイク画などを出展されました。

「子ども点字教室」を開催しました

昭和35年、隣接する上野市盲人ホーム(現・伊賀市盲人ホーム)の図書室からスタートした上野点字図書館は、昭和46年に正式な国の認可を受けました。以来今日まで、視覚に障がいのある皆さまに点字図書や録音図書の貸し出しを行なってきました。

また視覚障がい福祉への理解を深めてもらうため、様々な活動にも取り組んでいます。その一環として、今年度は8月に「子ども点字教室」を開催しました。当日は暑さ厳しい日となりましたが、17名の子どもたちが1時間半という短い時間のなかで、点字の仕組みを学び、自分の名前を点字で書いたり作りました。子どもたちは、説明する職員の話に耳を傾け、熱心にメモをとり、点字を書いていました。

上野点字図書館



点字器を使って点字を書く子どもたち



「さをり織りとかばんを作りました」



「この俳句は私たちが作りました」

◆ご支援ご協力いただいている方々◆ (平成30年2月～平成30年12月)

個人 (敬称略・五十音順)

- 石山 淑子、市岡 紹子、伊藤嘉枝子、伊藤 利史、稲垣 寿子、稲森千鶴子、井上 操、上杉 重一、上野 庸、有城 安子、大久保博司、岡田 勝美、岡田 充恵、岡森 明彦、岡森眞理子、奥田 英夫、小澤ひとみ、小田 吉昭、貝増 恒子、門田 進、神園 敏昭、神村久仁江、北泉 優子、木下真砂子、葛岡エミ子、窪田 朱子、後藤 のぶ、権蛇 忠寛、佐々木聖子、城野八重子、島崎 恵子、嶋澤 正彦、清水 栄子、清水 公人、田中美代子、田橋 奈緒、菅 康子、角田 充代、竹内佐千子、田中 澄夫、田中 聖子、豊田 隆子、田山紗知子、塚本 初子、津田 美恵、戸上 宗賢、豊岡 百子、豊田 實、豊田 礼子、中尾 悦子、中岡 紘一、中川 定子、長島多恵子、中島 露子、中村 節子、中村 信通、中森 洋子、中矢 英夫、中山 洋美、西出 成子、福森 茂貞、藤井 充子、藤永 清信、藤森 直美、古川 節郎、堀池 行雄、堀池 良一、前 則幸、松尾起世子、松岡 秀行、松田 雅子、松永 清、松岡 伸、松本 学、水野 富子、水野 文子、水船敬太郎、森 千鶴子、南 久子、百北 幸雄、百北富美子、百中 美正、森 新一、森 令子、森岡 佑子、森下 弘子、森中 一美、森本 弘子、矢口キ又代、藪山 登貴、山口 義美、山下 吉男、山出 栄子、山本 濱子、山本 泰代、弥村 藤樹、吉川美智子

団体 (敬称略・順不同)

- 上野点訳奉仕グループあい、上野音訳グループしびの、名張点訳グループあかり、名張音訳グループこだま、上野点字図書館読書ボランティア、ミックスマジューズ、絵本ボランティア「もこもこ」、煌星俳句会、声のポスト友の会、蕉門ホール「語り部塾」、少林寺拳法三重上野道院、白ゆり会、大正琴音夢の会長田すずらん、ちいさなネコ、にじいろ会、にんじんクラブ、ぼっぴお会、マンミーダ、三田コラス、リズム体操クラブ伊賀上野、伊賀F.C.、伊賀上野ライオンズクラブ、伊賀北ライオンズクラブ、伊賀市更生保護女性の会、伊賀市視覚障害者福祉会、伊賀市シニアホール人材センター、伊賀地区交通安全協会女性部、伊賀市ゲートボール連合会、上野ゲートボール協会、上野ロータリークラブ、伊賀警察署、あけぼの学園高等学校、伊賀白鳳高等学校、岡波看護専門学校、長田小学校、成和小学校、府中小学校、南山城村、太滝地区、桂地区、朝屋地区、治田地区、花之木地区、予野地区、明日が楽しみな里つくり委員会、猪田地区市民センター、上野東部地区老人クラブ連合会、上野徳居町徳寿会、上野福居町自治会、大野木ゆうゆうクラブ、小田地区市民センター、小田町住民自治協議会、五月川漁業協同組合、たかはた農村農業振興保全会、朝屋老人クラブ、寺町いきいきサロン、友生地区住民自治協議会、友生老人クラブ、中瀬老人クラブ、長田地区市民センター、長田地区住民自治協議会、西三田100円サロンふれあい、花之木環境保全会、花之木地区市民センター、花之木社会福祉協議会、府中地区市民センター、三田地区住民自治協議会、緑ヶ丘地区ひまわり会、緑ヶ丘市民自治会、ゆめが丘地区住民自治協議会、ゆめが丘地区民生委員児童委員、保育園保護者会、安立寺、黒住教上野中教会、西蓮寺、田守神社、常住寺、平井神社、いがの里、おおやまた鶴寿園、名張育成会、名張特別養護老人ホーム、ひとみ園、伊賀上野ケーブルテレビ、今岡穀店、上野ガス、小川整備、奥田理谷店、金谷、鎌刈乳販、欣榮堂、グリーンティ高尾、コーカ共同製茶、田山南部共同製茶工場、甲野屋、小山、サンシヨク、志摩すし店、親和工務店、谷本洋陶器、鶴萬、鍋本商店、西沖業、西尾テニキ、はつぴーあーむ朝屋、福田豊工務店、フランスベッド、堀川商店、マルノウ、村協電気、名阪上野ドライビング、名阪設備工業、森下農場、米岡家具センター、ロート製菓、JAIいがふるさと、NAC

「おめでとうございます」

山口県下関市で開催された、日本盲人社会福祉施設協議会主催の第66回全国盲人福祉施設大会において、音訳ボランティアの米田伊佐子さんと谷本悦子さんが奉仕者表彰を受賞されました。ともに活動歴18年のお二人が製作された録音図書は、全国の視覚に障がいのある皆さまにご利用いただいています。心からお祝いを申し上げますとともに、多年のご奉仕に深く感謝申し上げます。



米田伊佐子さん

谷本悦子さん

音訳ボランティア

ロート製菓株式会社「かるがも基金」より

2011年度より毎年ご寄付をいただき、7回目となる今回は以下のものを購入させていただきました。新機能が搭載された録音図書再生機2種、パソコンの操作を音声でガイドする読み上げソフト2種、デスクトップパソコン1台、来客用ベンチ1本。これらは、たくさんの方々に体験していただけるよう上野点字図書館入口に設置しましたので、興味のある方はお越しください。



上野点字図書館の来館者用スペース

平成30年度受賞者

- 厚生労働大臣表彰 府中保育園 園長 佐田 恵子、盲養護老人ホーム梨ノ木園 事務長 田中 広子、全国社会福祉協議会会長表彰 予野保育園 園長 西出 展子

編集後記

かつて日本がバブル経済に沸いていた頃、「平成」が産声をあげました。それから30年の時を経て、間もなくその役目を終えようとしています。今年度創立70周年を迎えた伊賀市社会事業協会は、昭和23年から地域社会と共に歩み続けてきました。当法人にとって、また我々職員にとって新たな元号となるこれからは、どのような時代に移り変わっていくのでしょうか、いやが上にも期待が膨らみます。

さて、平成最後となる「会報2019」は、皆様方のご協力のおかげで発行することができました。今後とも変わらぬご支援のほど、どうぞよろしくお願いたします。次号は今夏発行予定です。(編集者 H)

つなげよう未来へ

70年の歴史とともに

12月1日、当法人の創立70周年記念式典を開催いたしました。式典には日頃よりご支援いただいているボランティアの皆さま、関係団体・法人関係者など、多数ご臨席くださいました。

記念講演会には佐々木常夫様を迎え、家庭問題に直面しながらもワークライフバランスを実現し、仕事ではキャリアを追求され、家庭・仕事ともに全力で向きあつてこられた経験談を聞かせていただきました。

私たち職員も、仕事とプライベートとのバランスをとりながら、真心を持って仕事に向かう姿勢を大切にしていこうと思えました。今後とも福祉ニーズにお応えできるよう努めてまいります。



佐々木常夫マネージメント・リサーチ代表の講演
(元東レ株式会社取締役)
(元東レ経営研究所社長)

